

メンタル・スペース理論と過去・完了形式：日本語 と韓国語の対照

曹, 美庚

広島修道大学人間環境学部：助教授：日韓対照言語学、異文化コミュニケーション論

<https://hdl.handle.net/2324/6055>

出版情報：2003-06-30. 広島修道大学総合研究所
バージョン：
権利関係：

第6章 終 章

言語は人間の思想伝達の道具であり、事態認識の反映物であるため、話者が認識したもの、または伝達しようとする思想は何らかの形で言語形式に反映されている。Fauconnier [1990] はこのような考え方のもとに、メンタル・スペースの概念を導入し、言語表現をレベルE、現実世界をレベルRとした上で、新たに設けられた構造をレベルCとしている。

本研究は、現実世界RとレベルCを独立に設定するこうしたメンタル・スペース理論を導入することで、「タ」「㊦」と関連し、話者の「完了認識」という認知レベルのものに対し記述的かつ明示的な説明を与えることができた。「タ」「㊦」の言語表示は、現実世界の時間的制限を超え、レベルCのスペースを構築し、ある事態の限界達成後の後続スペースに話者視点をおきつつ、その事態を振り向くことによって生じうる話者の「完了認識」の表出である。すなわち、レベルCの時間の流れは、現実世界とは独立しており、話者は時間の流れの中を行き来できるため、ある事態が限界達成に達する一連の流れ全体をスキャンし、その事態の「完了」を認識することができる。その結果として、「タ」「㊦」が表出されるのである。

このようなスペース的次元で考えることによって、テンス・アスペクトの「過去・完了」はもちろん、その他のモードとされている「回想、経験、報告、発見、思い出し」などの「タ」「㊦」に関しても、それが話者の完了認識による心的表示であるという一貫性のある説明を与えることができた。さらに、ある未実現事態が存在しその事態が限界達成に向けて進行する際に「タ」「㊦」が発話される場合、事態選択に対する表現に「タ」「㊦」が発話される場合、ひいては仮定条件に「タ」「㊦」が発話される場合にも、それらがスペース的次元における「完了認識」を反映する心的表示であるとの解釈を与えることができた。要するに、メンタル・スペース内部では絶えず事態の認識が行われ、その心的完了の認識マーカーとして話者の発話に「タ」

「ㄹ」が表示されるのである。

本研究では、ある事態に対して時間的制限を超え話者の「完了認識」を語ろうとするこうした「タ」「ㄹ」を、心的「タ」「ㄹ」と名付ける一方、これら「タ」「ㄹ」の表示がレベルCにおいて認識されるプロセスを図によって説明した。その際、日本語と韓国語には、レベルCにおいて事態変化のプロセスが把握できるか否かに程度の差があり、それが「タ」と「ㄹ」の許容度に差をもたらす語用論上の差異につながることを考察した。すなわち、日本語では、未実現事態の変化プロセスを直接知覚できるかのように確信されなければ「タ」は使われ難いものに対して、韓国語では状態変化後のスペースさえ設定できればプロセスの具体性に関わらず「ㄹ」が用いられる。

本研究はさらに、このような話者の「完了認識」による心的「タ」「ㄹ」が成立するスペース的解釈の範囲を条件文や事態選択のムード形式にまで拡大し、「タ」「ㄹ」の発話全体について、それらが話者の「事態認識マーカー」として一般化できるという可能性をも提示したことになる。

未実現事態の用法として使われている、心的「タ」と「ㄹ」を、話者の主観的認識の表現として話者視点に注目し、スペース的に解釈することで、テンス・アスペクトの研究において例外的用法とされてきたさまざまな「タ」「ㄹ」に対してはもちろん、条件節や従属節の「タ」「ㄹ」をも含む、全体としての類似表現について明示的かつ統一的な解釈の切り口が提供されたことになる。すなわち、こうしたスペース的解釈によって「タ」「ㄹ」がテンス・アスペクトのマーカーであるというより、話者の心的態度を表す「話者認識マーカー」へと変わっていくと想定するのである。これは、話者認識マーカーとしての「タ」「ㄹ」という新たなパースペクティブを提案することを意味するといえよう。

さらに、「タ」「ㄹ」が未実現事態に使われる用法に関するこのような解釈とその語用論的相違の観察は、日韓両言語に対する理解や教育にとっても有用なデータを提供することになるだろう。

これまでの研究結果を踏まえつつ、未実現事態に使われている「タ」

「𠄎」現象のデータをさらに蓄積し、より高度な記述と精緻な理論化を図ることは今後の研究課題である。